

---

# ミコト ほおづき

かよきき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ミコト ほおづき

### 【コード】

N2538N

### 【作者名】

かよきき

### 【あらすじ】

不思議な毒屋、ミコトに関わる人間たちのお話

## 1部（前書き）

全編を通し視覚障害者が登場しています。十分に言葉に配慮をしているつもりではありますが、気分を害される方は視読されないことをお勧めいたします。

## 1部

如雨露じゅうろから注がれる水の音で、いつものようにダイは目を覚ました。妻のツキがほおづきに水をやっているのだ。

「ふわあゝあ…… もうすぐ咲くのかい？」

「あら、お目覚めかい？ うん、そうねえ。もうすぐだねえ」

おそらくツキは、ほづきに顔を近づけて目を細めているに違いない。小さくても庭のある長屋で良かったと、ダイはフツと笑った。その時、鐘の音が聞こえた。

「ん？ 何時だ？」

「もう辰の刻、五つ半だよ」

「おっと、今日は朝から山本様に呼ばれているんだった。ツキ、俺あすぐ出るぞ」

「あ、はいはい」

ダイが急いで寝巻きを脱いでいると、急いでツキは居間に入り、仕専用の着物をダイの左袖から着せ帯を巻き、箆笥から足袋を取り出すとダイの右手に手渡す。ダイが足袋を履いている間に、ツキは台所で弁当のフタを閉め竹皮で手早くくるんだ。慌てて玄関口に用意してある風呂敷包みを背負う。

「行ってくる。」

「あちよつと、お弁当だよ」

「おっと……」

ダイはくるりと振り返ると、右手で宙を探した。

ツキは、いつものようにパツと夫の右手を捕まえると、弁当の包みを握らせ、ギユツと強く、優しく握った。

「行ってらっしゃい。今日も稼いどいで」

「おっ」

ダイの左手には、少し長めの杖。

そう、ダイは目が見えない。

## 2部

今でこそあん摩をしているが、元は将来有望の大工だった。棟梁にも見込まれ、まわりから努力も買われ、いつか必ず人様のためになんかデツカイ物を作る。それがダイの夢だった。

だが、十四年前。ダイは木材の下敷きになった。

体は治ったが、頭の打ち所が悪かったらしく、それからすっかり目が見えなくなってしまうた。大工も廃業せざるをえず、当時はずいぶんと荒れたものだ。しかし結納したばかりのツキはそんなダイをいつも優しく支えてくれ、今に至っている。

嫁のツキは卒が無く、出すぎたことも言わなければ、家事もしっかりして近所付き合ひもでき、すこぶる評判が良い。夜、ダイが帰宅するとちようちん貼りの内職の手を休め夕餉を出し、今日あったことを面白そうに話す。みんなから、若くて美しい嫁でうらやましいと、からかわれるほどだ。そんなツキは、今のダイにとって自慢であり、誇りであり、全てだった。だが一つ、ダイにはツキに不安があつた。

ずいぶんと痩せていることだ。

あん摩の仕事で色々な人の体に触るダイは、ツキの体がどんなに痩せているか解る。今はもう三十を過ぎていているというのに、まるで脂がついていない。

まるで出会つたあの時の十八のままのような華奢かぜつやな体だ。

普段、自分はしつかりと食事を摂っているが、ツキが食べている姿を見ることが出来ないダイにとって、ツキが無理して生活をやりくりしているのではないかという不安であつた。

かといってあん摩の仕事でそこまで稼げるわけでもないのだが、少しでも評判が立つように、長めに施術をしたり、少しでもまた呼んでもらえるよう料金を安めにしたりにしているが、そこまで客が増えるということもなかった。

### 3部

杖を使い人の流れにそつて、歩いていると聞きなれた声がした。

「よう！ ダイじゃねーか。これから仕事かい？ あん摩にしちゃ早いご出勤だな」

「おう八チか。昨日の遅くに使いがあつてな。珍しく朝一番で来てくれたって言われてんのさ。お前は遅いじゃないか、今日は現場じゃないのか？」

「ああ、もうすぐ杉本様の屋敷を改築するんで、これから打ち合わせだよ」

ダイに声をかけたのは八チと言ひ大工時代の同僚だった。今では若くして棟梁になつている。未だにダイのことも気につけ、付き合いをしてくれている。ダイにとつて友人といえは今はもう、この八チくらいなものだった。

「今日はツキさんいるのかい？ いい自酒が入ったんだ。あとで持つてつてやるから晩酌にでもしろよ」

「いつもすまないな」

「おう、じゃあな」

そういうと八チが元気な足音で遠ざかつていく音が聞こえた。ダイは少し微笑み、再び杖を頼りに町を歩きだした。

今日の客は、いつもごひいきにしてくれる武家の山本様。四十五を過ぎたところで、まだまだ若いのだが、息子が十八になったとたん、家督を継がせ、自分はさつさと隠居してしまつた。今は、昔から好きだったという絵を描いてばかりの生活をしている。そのためか最近、腰や腕がこつて仕方ないと十日に一度はダイを呼び出すというありがたい常連なのだ。

しかし、今日の山本は違つていた。あれ程力チコチだった体に、コリが全く無いのだ。まるで太つた子供のようになややかな体をして

いる。

「困りました山本様。これでは、私の出る幕はございません」

山本はコリなど無いはずなのに、何故かだるそうに寢室の床に、うつ伏せで寝転がったままだ。

「それがのう、コリは取れて痛みもないのだが、体にまったく力が入らんのだ。どうもワシはコリがなくては、体が動かぬような気がしてきてのう。お主は毎回見事にわしの体をほぐすではないか、もしかしたら逆にコリを体に入れることも出来るのではないかと思つて今日は呼んだのじゃ」

ダイは困り果てて思わず、頭を下げたあやまつた。

「あいすみませぬ。山本様、大抵のコリはほぐせますが、入れると言われましても困ります。いったいどうなされたのですか？ せめて表側も診てみたいのですが、仰向けにはなれませぬか？」

山本は、急にダイに向けていた顔を反対側に向けた。

「い、いやもう良い。たぶん無理じゃ。すまぬ。馬鹿げた事を頼んだ。ふう、やはりこうした本人に聞いてみるしかないかのう」

「本人？」

ダイは少しうろたえた。ここまで体中からコリを消せる人間がいるのだとしたら、自分など、もうお呼びもかからなくなるからだ。

「じつはのう、数日前にヘンテコリンな商人と出会つて、そいつから買った毒を買つたらこうなつたのじゃ」

「ど、毒ですか？」

「うむう。その毒を飲むと副作用で体中のコリは消えるのだが、本作用でひと月は体に力が入らなくなるとな。言われたとおりなのじゃが、ちと本作用とやらが強すぎる。まったく変な買物など、するものでない。」

「しかし、ひと月も寝たきりでは、コリが取れても肉が落ちて病み上がりのように、だるさが残る体になりますよ」

「そ、そうなのか？ 困つたのう……」

ダイは腹が立った。いくら金儲けのためとはいえ、そんな酷い薬

を売りつけるなんて詐欺同然ではないか。

「いったい何処で会われたのですか、その毒屋とやらに。私が解毒剤がないか聞いて参ります」

「本当か？ すまぬのう」

ダイはその毒屋に出会った場所を聞き出し、手早く後片付けをし山本邸を後にした。



## 4部

そこは、町外れの大橋のかかる河川敷で、人の往来も多く露店を出すにはピッタリの場所だった。現にいろいろな露天商が競うように啖呵をきりあっていた。

失敗した……ダイは思った。

目の不自由な自分にとって人探しは容易なことではない。露天商の売り文句を聞きわけようとしても数が多すぎるし、みな街をまわる者達だから、聞いてもどうせ他の商人のことなど知りもしないだろう。

遠くで鐘の音が聞こえる。もう午の刻だ。あと一刻過ぎたら次の予約した患者の元にはいかなねばならぬ。

「これは、いったんあきらめる他あねえな」

ダイは、軽くため息をついた後に、土手を少し下り斜面の草むらに座った。

川の流れる音、子供が遊ぶ音、露天商の売り文句、風で擦り合う草の音。沢山の音がダイの耳を通り過ぎていった。この土手で座るなんて何年ぶりであろう。見習い大工の頃はよくこの辺で大橋を眺め、いつかこんな大仕事を任されてみたい。……と夢みていたものだが。

ダイは包みの中から弁当を取り出した。嫁のツキ特製の弁当だ。と言ってもウチは裕福ではないので、小さなメザシと大きめの梅干が入っているだけなのだが。しかし、ツキはメザシをただ焼くのではなく、料理屋で教わったという佃煮にしてくれている。梅干も丸々と大きな梅でこれが一粒あれば何杯でもいけるといふ愛情のこもった弁当だ。

箱を開け、さあ一口目、とご飯を口元に持っていったとき、背後で妙な気配を感じた。ダイは目も見えないのに振り向いた。

……臭い。

おそらく何日も風呂に入らず、着物も洗っていないに違いない。そういう饑えた匂いがダイの鼻を直につき、おもわずむせた。大橋の下をネグラにする乞食だろうか。

「く……」

次は生唾を飲み込む音が聞こえる。ダイはとつさに弁当のフタを閉めた。勤務中の唯一の楽しみを盗られてはたまらない。

「あ……」

「『あ』じゃない。誰かは知りませんが頼むから向こうに行つててくださいな」

「はあ、こりやどうもお邪魔いたしました……」

なんだかとても残念そうな男の声。だが目の見えない自分すら、こうして毎日働いているというのに、何もせず人に物乞いをする者になど同情の余地はない。

草を踏む音がして、その者がほんの少しだけ遠退いたの感じた。それでも匂いは消えない。風の強いこの河川敷でここまで匂ってくるというのは相当である。しかし時間もない。そろそろ昼飯はすまさなければ。ダイは再び弁当箱を開け、パクリと一口ご飯を食べた。

## 5部

美味い。いつも通りの味でいつも通り美味い。ダイは思わず頬が緩んだ。二口目を口に運ぼうとすると、また音が聞こえた。

きゅるるる……

今度は腹の虫だ。先程の者はどうやらまだ自分の事を見ているらしい。だがふと疑問に思った。もし乞食の者ならば、こんな目の見えない者相手にどうして盗みを働かないのか？ やろうと思えば容易に奪えるはずである。いったい何故？

「もし、そののかた。もし……」

「は、はい？ 私のことですか？」

「あなた、ここいらの浮浪者ではないのかね？ ずいぶんいい匂いを漂わせているが、相当洗濯していないだろう、その着物」

「え?!」

そう一言、その者は呟くとしばらく沈黙があった。おそらく自分の匂いを嗅いでいるのだろう。

「あれ？ そんなに匂います？ そういえばいつだっけなあ最後に洗濯したの」

「あんた、橋の下をネグラにするもんではないのかね？」

ダイは単刀直入に聞くとその者は、ふき出した。

「ち、違いますよ。いや、でも似たような者かな。昨日の晩に土手で居眠りしていたら物取りに遭っちゃいましたね。起きたら財布ごと、ごっさりですて……」

「そりゃまあ大変だったねえ。じゃあんた、今日は飯を食ってないのかね」

「というより昨日の朝から何も……元々、金もあまり持ってないほうですて、えへへ」

きゅるるる……

また男の腹の音が聞こえてくる。

ダイは箸の柄で頭をかいた。軽くため息をつくとき弁当箱に箸をのせて、男の声のする方に差し出した。

「ほら、食いな。そんな音たてられちゃあ、喉も通らないよ。おらあ、あと二、三件も仕事して帰りや、また飯にありつける」

「え？ い、いいんですか？ 本当に?!」

「ああ」

「あ、ああありがとうございます！」

そう言うと男はダイの手からカツさらうように弁当を取るとむしゃむしゃと食べ始めた。

「う、旨っ！ ご主人、メザシの佃煮なんて味なことしますね。むほ、山椒が利いてたまらない。うん、うん。む？ またこの梅の漬け具合のよろしいこと。すっぱ旨い！ こんな梅干しは初めてですよ。あなた、料理上手のお内儀で幸せ者ですなあ」

「だろう？ オレとこの嫁は日本一さ」

「まったくです。かあくうらやましい えへへへ」

あつという間にその者は食べ終わった。すぐさま川べりまで弁当箱を洗いにいったようだ。災難だったが悪い奴じゃない。ダイはそう思い微笑んだ。男は弁当箱をダイの手に持たせた。

「ご馳走さまでございました。これであと二日は持ちましよう。なんとか恩返しでも出来ればいいんですが、あいにく金はないしなあ。困ったなあ」

「いいよ別に。それ程のものでもない。」

「す、すみません」

「旅の行商でもしてるのかね？」

「ええ、まあそんなところですよ」

「何を売ってんだい？」

金ならこつちが欲しいくらいなのだが、困った時はお互い様だ。使えるものなら買ってやるつとダイは懐に手をいれ財布を掴んだ。

「まあ、そのなんというか説明すると長いんですが、簡単に申しますと毒でして……」

「ん？ 何だつて？」

「いえ、毒つて言つたつて人が死んじゃうような奴じゃなくてちよつと体に毒なんだけど副作用で治つちやう部分もあるっていうですねえ……」

ダイは思わず見えない目をつ開いた。

「じゃあ、あんた、毒屋か？！」

「ええ、まあ」

ダイはおもいきり声のするほうに向かって右手を出し臭い着物をしっかりと掴んだ。

「このスットコドツコイがあ！」

そして思いつきり頭をはたいた。

「い、痛！ なにするんですか！ 突然！」

ダイは、見えない目で男を睨みつけた。

初夏の風が、ぴゆるりと二人を吹き抜け、チャポンと川の魚が跳ねた音がした。

## 6部

「こいつだ！ 貴様よくもインチキなモノを売りつけおって！」  
ダイは男を連れ再び、山本邸の庭先に来ていた。男はうつ伏せのままの山本をジィツと見て思い出したかのように言った。

「あ、ああ。あの時のお侍さま。あら昼間っから寝っ転がっちゃて、いいなあ」

ダイは再び男の頭をひっぱたいた。

「痛！」

「山本様はお前のせいで、寝たきりになってるんだろっが！」

「はあ？」

山本はあまり同じ方向に首を傾けていると疲れるのか、反対側に向けた。

「き、貴様から買った毒を飲んだら体中からコリが取れたのはいいが、まったく動けなくなってしまったのだ。なんとかかせい！」

「ええ？」

男は眉をひそめて口を尖がらせた。

「そんなわけないんだけどなあ。あ、ちょっと失礼しますよ」

男は、草履をぬぎ山本の寝る部屋に入るとしばらく山本を見た。しばし沈黙が続く。

「うーん……ん？」

男は山本の腰の辺りを見てニヤリとした。と思つたら突然、山本の右肩と右足の辺りの着物を思い切りつかんだ。

「あ、こら！止めなさい！こらー！」

「あ、よいしょっ！」

掛け声と共に勢いよく山本は仰向けにされた。ダイには何が起こっているのか全然わからない。

「ああ、やあっぱりー。お客さん、私の言ったこと無視してあの毒、同時に使いましたね？」

「そ、その通りじゃ。だから早く元に戻せ！誰かに見られたらどうするのじゃ！」

山本は慌てて声を荒げた。

「よっこいしょ」

「お！ おうう」

何か傷みがあったらしく山本はうめき声を発した。

「一応、毒出しを出します。でもそっちの方は、あと一晩は続きますから諦めてください」

「う、うむ。体さえ動くようになれば文句は言わぬ」

二人は途中からゴニョゴニョと小声で話していて、ダイには何が起こっているのか検討が付かなかったが一段落ついたらしく。山本は少し機嫌よくダイに声をかけた。

「お主、迷惑をかけたな。今日の分もちゃんと代金は支払うゆえ、心配無用じゃぞ」

「はあ」

「毒屋、これをあの座頭に渡してくれ」

「はい」

すると毒屋が草履を履き、こっちに近づく音がすると、ダイの手をとり金を渡した。いつもの倍の料金だとすぐに解った。

「あ、ありがとございますー！」

## 7部

山本邸を出ると歩きながら、すぐに毒屋はこらえていたかのように笑い出した。

「ぷわははは、まったくお歳だというのに」

訳の解らないダイは面白くない顔をして毒屋に聞いた。

「いったい何があったんだ？」

「いえね、あのお客さんに売ったのはコリを取る毒だけじゃないんですよ。ほら、アツチが元気がなる毒もお売りしたんです」

「アツチってアツチか？」

「ええ。コリをほぐす毒は全身の血行をよくすると共に肉を柔らかくする作用があつて、元々ひと月はだるさが残るけど、その後は回復するというモノでした。一方、アツチの方は血流を普段の二倍以上に変え、その血流がとくにアツチの部分に集まるようにした毒で、心の臓の悪い方には非常に危険な毒だったので、なにせどちらも血の流れを良くする毒ですから効果が倍増してしまつて、アツチは元氣いっぱいですし、体の力は異常に抜けていくつてことになつちやつて、せつかく買ったのに使えない状態になつちやつたわけですね」

ダイも、思わずふきだした。

「そら難儀だあ。ははは」

「まったくです。ぷぷぷぷ」

ダイが笑っていると、毒屋は突然ダイの手に金を握らせた。

「あの先程のお弁当のお礼です。今のお客様から毒消し代として頂きました。少ないか高いかわかりませんが……」

ダイは握った金をそのまま毒屋に突き返した。

「何言つてんだ。一文無しなんだろ？ 少しでも持ってた方がいい。そうだ、あんた変な毒いっぱい持つてそうだな？ 一つ俺の目が見えるようになる毒なんてないのかい？」



ダイは冗談交じりで言った。どんな医者に見せても回復しないと  
言われ完全に失明した目だ。治す薬も毒もあるはずない。まあこの  
憎めない毒屋の旅路のはなむけに、胃薬くらい買ってやるつもりで  
いた。

「……無いこともないですが……」

「あ？」

ダイは耳を疑った。

「実は、この毒は誰も使ったことがないのです。ちょっと笑えない  
本作用があります、あまりオススメ出来る品ではありません。」

「本作用って、どんな？」

「失明の場合、目の内側にある膜と、その神経がやられている場合  
が多い。その神経にそっくりな性質を持つ根をした小さな小さな植  
物の種を点眼するのです。すると植物は人の体の中に寄生し神経と  
入れ替わろうと根を生やすのです。それで一瞬のことですが、その  
根が光をもたらず。……というものです。」

「み、見える？ 一瞬でも見えるようになると言っのか!？」

ダイは毒屋の言っていることがよく理解できなかったが、一瞬見  
えるようになるということだけは理解した。

「はい。ですがおそらく、その植物の根は目の神経に留まらないの  
です。確実に他の神経にまで根を伸ばす。そうすると、何かしらの  
感覚が失われてしまうのは間違いないです。消えた感覚は元に戻り  
ません。元々寿命が短く人間の体では生きられない植物ですから、  
全て奪われる前に枯れて体外に自然排出されていくと思えますが、  
なにぶん使ったことがないのでわからんです」

「感覚って……」

「五感ですよ。視覚、聴覚、嗅覚、触覚。味覚、そのどれかが失  
われていくはずですよ。ですから、ちょっとこれを渡すのはいくらな  
んでも気がひけます」

ダイは緊張して体が固まった。もしこれ以上何かを失ったら生き  
ていけないだろうか？

「……………あんだ……………」

その時、ツキの声を思い出した。最後にツキの顔を見たのはツキがまだ十六歳の頃、あどけなく少し垂れた目が可愛い顔だった。今のツキはいつたいどんな顔をしているのだろう。見たい、見てみたい。ダイは迷わなくなった。今更暗闇の一つや二つ増えたところで何が怖いものがあるものか。

「くれないか？ その毒」

「でも……………」

立ち止まって頭を下げた。

「たのむ」

毒屋は困って無言になり、しばし考えこんでいる。カラスがどこかで鳴き、共鳴するように遠くでも鳴いた。

「わかりました。目が見えない苦しみは私には計り知れない。ただし、出来るだけ歳を召してから使うことをオススメします」

「すまない」

毒屋は通りの端っこに座りこみ、荷物をあげ手早く何かの作業をはじめた。おそらく毒を調合している。作業はほどなく終わり、小さな油紙の包みがダイの手に渡された。

「私の名前はミコトと言います。もし服用するなら立会いますので、なるべく草木の多いところで呼んでください。遠くにいても出来るだけ早く会いにきます」

「草木の多いところで呼べって…………… ないだいそりゃ。それでアンタに声が届くのかい？」

「それは、アナタの運次第でしょう」

「アンタ、いつたい……………」

ミコトはニッコリと笑ってダイの肩をポンと叩く。

「お弁当、ご馳走さまでした。では！」

そう言つとミコトは、すっと立ち上がり人ごみの中に紛れていた。

「おかしな男だ」

ダイはゆっくりと首をかしげつつも、もらった毒の包みを大事に胸の財布の中にしまい込んだ。その時、ふと体の匂いが気になった。あまりに臭いあのミコトとかいう毒屋をふん捕まえて連れてきたので、多少だが匂いが着物に移っていたのである。あん摩は客に近々に近づき触れる商売。こんな匂いがしていたのでは商売にならない。杖をまた自宅の長屋の方に向けた。

「ここからなら、長屋まで半刻もかからんだろうからな、次の客の宅にほんの少し遅れる程度だろう」

ダイは足早にむかった。

## 8部

「おい、ツキ。 ツキや」

自宅の玄関を開ける前から、ダイはツキを呼んだ。なにしろ客は好き勝手に呼ぶくせに待つ事はこの上なく嫌いなものだ。早く行かなければ何を言われるかわからない。ダイは思い切り玄関の戸を開けた。

「ツキ、ちと災難にあつてな。すぐ着替えて行きたいんだが……」

玄関を入ると、すぐ酒の匂いが鼻についた。ツキの返事も無く、家の中は静まり返っている。

「ツキ？ 留守なのか？」

手探りで部屋の中に入り、居間の隅を探ると何も無い。そこにはいつも内職の提灯が置いてある。だいたいは店の者が取りに来て代金を置いていくのだが、たまに店が忘れてしまい、ツキが品を届け代金を受け取ることもある、と前に聞いたことがあった。おそらくそれだろう。

しかし、この酒の匂いは？ ダイは代わりの着物がいつも掛けてある壁側を探っていると、足元に何かあたり、倒れた。

トクトクトク……水がこぼれる音がすると足元が濡れて冷たくなつた。ムンと一段と強く酒の匂いがした。

「ああ、そういえば八手が……」

今朝八手が地酒がどうのと言っていたのを思い出した。おそらくこれは八手が持ってきた酒だ。昔馴染みの八手は当然ツキのことも知っている。二人で味見くらいしたのかも知れない。

その時、遠くで鐘の音がした。

「しまった。約束の時間だ」

ダイは慌てて代わりの着物に着替え、杖を取り草履を履いた。

「あー！」

こぼした酒の始末をしなかった。あーというのは放置すると後で

匂う。しかし今は急いでいる。

「すまん。ツキ」

そう呟くと、ピシヤンと戸を閉め足早に次の客に向かった。

カン、カン。　カン、カン。

夜の街に火事注意の巡回の音が響く。こついうのは大工か鳶の仕事だ。意外にダイの昔の仲間がやっているのかもしれない。目が見えていても、この時間はあまり役に立たない真夜中だ。

今日も無事予定通りの仕事が出来た。いや、あの毒屋のおかげで一回分多い賃金だ。その金でダイは焼き鳥屋で串を数本買った。酒をこぼした侘びのつもりだ。

「ツキ。今帰ったぞ」

ガラガラつと戸を開けると味噌汁のいい香りが漂ってきた。

「おかえり。お疲れさんだね。あれ、なんだいそれ、ずいぶん美味しそうな匂いだね」

「いや今日はいろいろあつてな。ああ、昼はすまなかつたな」

「……え？」

ツキはダイの羽織を脱がせる手を一旦とめた。

「いや、酒をこぼしてしまっただろう？匂ってないか置」

「ああ、お酒のことかい。すぐ拭いたからそんなのだいじょうぶぞ。」

「ハチが届けてくれた酒だろう？　朝に会ってな。あいつには、すまないことしちまつた。」

「あのお酒なら、まだあるよ。お前さんがこぼしたのは別のに注いだやつ」

「ああ、そうなのか？　じゃあ余計に串が美味くなっちまうな」

「ふふ、そうだね」

「ちよつと、外で汗流してくるよ」

「ああ、じゃあ爛にしておくよ」

共同の井戸の洗い場で体を洗い汗をながす。腕や胸を洗っている、背中を勝手にツキが流しはじめ。毎日のことだ。こんなこと

が今のダイにとって幸せでならない。

頭も乾かない内に家に入ると、膳に夕餉が出て来る。お猪口を手に取ると小さくチン、と音を立てツキが爛をついでくれる。

「火傷しないでくれ」

「ああ」

ダイがぐいっと飲むと、手に串を持たせてくれた。

「ばか、俺はいいんだよ。ツキに買って来たんだ」

「もちろん、アタシももらうよ。お酒もね」

すると手酌で注ぐ音がする。注いでやれない自分がもどかしい。

するとツキがダイの肩に寄り添い、ダイの持っているお猪口とカチンと軽く合わせた。

「おいしいねえ……」

「ああ」

ツキの肩を抱き。頭に口付けをした。肩の骨の感触がツキが痩せていることを物語っている。苦勞をさせているのだろうか……それを聞く度胸はダイには無かった。もう一度、頭に、そして耳元に口付けをした。ツキが愛しくて仕方がなかった。

ツキはふと体を離れた。

「バカだねえ。お酒飲むといつもダメでしょう？」

ポンと下っ腹を叩く。ダイはふっと吹き出した。

「そうだな。ふふふ」

「そうだよ、まったく」

そう言つとツキはまたダイのお猪口に酒を注いだ。

いつものように如雨露の音で目が覚めた。ツキがほおずきに水をやってている。だがダイはすぐに起きず、そのまま音を聞いていた。ツキの鼻歌が聞こえてくる。

今日はダイの仕事が一件もない休みの日だ。たまにあるこういう日は、ツキも内職は止めて、二人で神社を回ったり、朝からツキが腕によりをかけて美味しいものを作ったりする。いつもコレと言って予定をたてているわけではない。

こうゆっくり出来る日はそうない。

ダイは布団の中で、昨日毒屋のミコトからもらった毒の包みを握りしめた。

(ツキに言えば反対されるに決まっている。何かの感覚が失われていく毒。でも何を引き換えにしても見たい。もう一度、ツキの顔を) まだ鼻歌は外から聞こえてくる。ダイは寝ころがった体制のまま、手早く毒の包みを開けた。粉状で目に入れたらかなり痛そうだが、ダイは躊躇なく両目に入れた。

「？」

予想に反して目の痛みはほとんど無い。多少チクチクとしたが、まるでほんの少しの涙で毒が全部解けてしまったかのようなだった。

プーン

その時、なにかが、ダイの顔にとまった。虫？ 掃うとまた顔についてくる。慌ててまた掃おうとするとペチンとまちがって頬つぺたで潰してしまった。

「くさっ！」

臭い！ 猛烈な臭いだ。ホオズキ虫に違いない。昨日といい今日といい災難が続く。ダイが腕で顔を拭っているとツキが急いで戻ってきた。

「あ、やっちゃったね。あれほどホオズキ虫には気をつけてって言



つてあつたのに」

ツキは慌てて玄関から出て、ほどなく戻ってきた。ダイの頬に冷たいモノが触れた。外の井戸で水布巾を作り顔を拭いてくれているのだ。

「まったく、子供じゃあるまいし」

「すまねえ」

「まったくだよ」

ツキはため息をつきながら、冗談ばくダイの鼻頭を水布巾でつまんで振った。

その時だった。

ダイの目にまったく久しい感覚が蘇ってきたのだ。

最初は強く眩しい光を感じた。それがだんだんと、光は輪郭を帯びてくる。

それは……見たくて、見たくてたまらなかつた顔だった。

痩せているおかげなのか、二つ下とはいえ三十過ぎの女の顔とは思えない若々しい顔だ。十八歳だったあの頃の面影をすっかりと残している。目の下と顎の横に懐かしいホクロを見つけた。大きめですこし目じりが垂れた愛らしい瞳は健在だ。薄い唇はすこし笑っている。ダイは自然と自分の目から涙がこぼれるのを感じた。

ツキは想像通りの美しい妻だったのだ。

「あ、痛かつたかい？」

ダイは何も答えず、ツキを押し倒した。

「あ、ちよつと」

そのまま、じつと、じいっと……ツキの顔を隅々まで見渡し口づけをした。

見えてないと信じているダイの目をじつと見てツキはかすれ気味に言った。

「まだ朝だよ」

「ああ、酒はもう抜けたろう」

日が沈む焼けた光が、庭から長い影を部屋に落としていた。こんなに幸せを感じたのは何年ぶりだろう。

たぶんツキにとつてもそうであろう。

視界が段々と暗くなっていることに気づいた。ダイはむくりと体を起こし、疲れ果てぐったりと寝息をたてているあどけないツキの寝顔を見つめた。

もう二度と、見ることは出来ないであろう妻の顔を、十分に焼きつけようと思った。

だが、ふと、ツキの向こう側にある化粧台が目に入る。ビクッ。

ダイは化粧台に立てかけてあつた鏡に映つた自分の姿を見て驚愕し、それから目を離せなくなってしまった。

禿げあがり、瞳は白く濁り、頬は弛み、肌は気味が悪いほど青白くシミだらけ。あれほど隆々としていた筋肉はそげ落ち、だらしく膨らんだお腹には毛がボウボウと生えていた。

頬を触る手が自然と震えた。

醜い。

自分の姿がこれほど醜いとは想像もつかなかった。

悲しくて悔しくて涙が勝手に出てきた。

ダイは、布団に潜りこみ、ツキに悟られないように声を押し殺して泣いた。布団の中で視界は完全に元に戻り、また暗闇の世界が戻ってきた。

次の日の朝、つけはもう支払われていた。

「この味噌汁、味が薄くないか？」

「え？ そう？ 美味しいけど」

ツキはちよつと不機嫌そうに答えた。直後にダイは思い出した。毒を飲んだ事を。

味覚が消えていたのだ。飯も漬物も、あんなに美味かったツキの料理がまるで、古くなった茄子を生で噛んでいるようだった。

「いや、勘違いだ。美味しい」

「もお。さつさと食べて仕事にお行き！」

「ああ」

ダイは小さくため息をつき、箸を茶碗の上に置いた。

「え、ちよつとお前さん、まだ残ってるよ」

「うん？ もう出るよ。今日も朝から山本様に呼ばれているんだ」

嘘だ。今日は午後から一件、寺の住職に呼ばれているくらいだ。

「へえ……じゃあ支度しなくちゃね」

ツキは膳を簡単に片付けるといつものように手早くダイを着替えさせる。しかしダイはノロノロと動きに精彩が無かった。

「あんた、どうしたんだい？ 大丈夫？」

「ああ、行ってくるよ」

ダイは力なく答えた。

玄関を出てからも、ダイの足取りは重かった。

別に味覚が消えたことが悲しいからではない。

自分の姿のあまりの変貌ぶりが、たまらなかったのだ。

冷静に考えてみれば当たり前なのだ、自分はもう将来有望の二十二歳の若い大工ではない。ずっとあん摩で暮らしてきた三十六歳の中年。色も白いだろつし腹も出る。失明して使っていないのだから瞳が

濁っていても仕方がない。数年後にはお得意客の山本様と同じ歳だし同じ体になっていく。だが……

(ツキは幸せなのだろうか？)

賃金は全部ツキに管理してもらっているので、ダイは正確な自分の収入を知らない。しかし、ツキのあのやせ細った体、内職の時間を見ればわかる。生活は苦しいのだ。

まだ鮮明に心に焼きついたツキの美しい姿を思い浮かべる。

あんなに美しく気立てのいい女だ。もっと幸せになれたらうに。そう思うと自分が情けなくなった。涙が溢れ止らなかった。

(一生、こんな男といていいのだろうか)

杖が止り、ダイの足も止まる。

幸い二人の間には、子供はいない。昨日見たツキの美しさなら、どここの誰だろうともらってくれるのではないか？

ダイは杖を動かさず、歩き始めた。

(恩を返さなくては、本当にツキを幸せにしなくては……)

カン、カン、カン。 トントントン。

懐かしい音が、そこかしこに響いている。ダイは昔、大工の時に世話になつていた

木材加工所にいた。ここでは、現地で組み立てる前に木材を加工する場所だ。

「あれ？ ダイじゃねーか。なんだ？ どうしたんだよ」

「ああ」

八千だ。ダイと同僚だった八千は今や、ここの長だ。

「話があるんだが、大丈夫か？」

「あ？ まあ少しなら、なんだ？ 話つて」

「人に聞かれたくないのだが……」

「……そうか」

八千は見習いを呼びとめ、ちょっと出て来ると伝えダイと共にその場を後にした。

二人は、加工所の前に流れる川の土手に来た。川沿いの通りに往来はあるが、ほとんど聞こえやしないし、ここで人の話を盗み聞きしようと思うモノはいないだろう。

「なんだよ。話つて」

「実はこの間、毒屋つてのに会つてな」

ダイは、この二、三日のことをかいつまんで話した。山本様の腰のこと、毒屋の事、目が見えたこと、味覚を失ったこと、そして自分の姿を見てしまったこと。

「み、見えたつてお前。いつからだ。今も見えているのか？」

八千は奇想天外な毒の話に、驚きを隠さなかった。

「いや、今朝までだ。もう元の暗闇だよ」

ダイは一呼吸おき、杖の柄を握り締めて言った。

「なあ八千。もし俺にもしものことがあつたら、ツキの面倒を見て

やってくれないか？」

八手は一瞬無言だった。当然だろう。誰でもそんなことを言われたらどう答えていいか困るはずだ。だが、ダイにとって友人は八手だけだ。出世もしていて顔も広い、ツキにふさわしい相手を探すのも容易なことだろう。もし八手が独身であるなら、ツキを幸せにも出来たろうが八手には妻も子供もいた。

「何、言ってるんだお前」

「このままツキを俺のような者の世話で一生終えるのを、俺は耐えられないのだ」

「お前、いつたい」

「断らない……よな？」

ダイは見えない目を開いて八手の方を見た。自分が真剣である、と意思表示だ。

「いや、しかし……」

「じゃ、頼んだぞ。ああ酒、ありがとうな美味かったぞ」

ダイは今は、変に断られる前にこれ以上語らず去った方が後々、八手は必ずツキの面倒をみてくれる。そう思った。

「おい。どうする気だ。バカな真似はよせ」

「とりあえず整理するさ。色々とな」

それからダイは、昼夜かまわず働いた。

あん摩師の仕事というのは、客の自宅でやることが多く、元々夜寝る前や深夜にいたることがほとんどだった。だが、それでも一般客相手だと仕事は限られてしまう。そこで、ダイは遊女やスジ者相手にも仕事をしはじめた。あん摩をし始めたころ、遊女相手に一度仕事をしたとき、逆に金を巻き上げられた事があり、それ以来、夜の商売をする相手には仕事をしてなかったのだが、もうそうも言っていない。

(金を貯めなければ……)

自分が居なくなったら後、当面の生活費をツキに残さなければならぬ

い。若い頃と違って徹夜は体に答えた。家に帰らない日も出るほどだった。ボロボロに疲れきって帰ってくるダイを、何も知らないツキは心配そうに迎えるだけだった。

そうして時間は経ち、すっかり初夏は過ぎ、緑まぶしい隆盛の夏を迎えていた。

ダイは、かけそば一杯六文の時代に、わずかひと月半の間に、銀が八匁、銅銭が千五百文の金を貯めた。これだけあればなんとか一年は暮らしていける。

目標の金額に到達した日、ダイが帰ったのは朝方であった。

ツキはもう眠っていて、戸は開いていた。昨日も遅くまで待っていたのだらう。

汗を流す気力もなく布団に寝転がった。となりでツキの寝息が聞こえていた。

「そろそろだな」

ダイは、そう呟くと意識が遠のくように眠った。

となりでその呟きでうつすらと目を開けたツキを知るよしもなかった。

ツキには仕事だと言って、ダイは朝から大橋のある川に来ていた。後は消え方だった

失踪扱いになれば死亡扱いになるまで数年はかかる。

自殺となれば、妻に問題があつたのではないかとツキに傷がついてしまう。

上手に事故死か、自然死に見せかけなければならなかった。

思いついたのは毒屋ミコトだった。なにせ毒屋だから、そういう便利な毒をきつと持っているにちがいない。この辺りで草木の多いところは外れに山があるが、ああいう場所は行きなれていないので帰つてこれない危険がある。だから知ってるかぎり草の多い川の土手にやってきた。ここはミコトに初めて会つた場所でもあつた。

「おい 毒屋。 ミコトよ。 俺だ、あん摩のダイだ。用があるんだ。ちよいと出てきてくれんか？ おーい」

何度呼んでも、誰も何も答えない。当たり前だ。こんな所にいるのはバツタか野犬くらいなもんだろう。からかわれたのかもしれない。だったら別のやり方を考えるしかない。

土手から上がり考えあぐねていると、顔に虫がついた。

「まさか……」

そつと感触を確かめて見ると、やはりホオズキ虫だ。ダイは慎重に払おうとしたが器用に動きまわりなかなか取れない。またほつておくかと我慢し、家に帰ろうとしたその時。

異常な悪臭が鼻を突いた。こともあろうにダイの鼻頭で臭い液をだした。これはたまらない。ダイは必死に布巾で拭うが取れやしない。

「あー！」

慌てている間に、杖を落としてしまった。これまずい、杖の感覚で道を覚えているからだ。辺りを手探りで探す全然あたららない。何



か枝でもいいのだが、まったく見当たらない。

「もし、誰か？ 誰かおりませんか？」

大声で助けを呼んでも、どうやら近くに誰もいないらしい。困ったダイはとりあえず人通りのある場所まで自力で行くことにした。

もし、誰か？ もし？」

ずいぶん歩いた。もしかしたら、川沿いを隣町の辺りまで来てしまったかもしれない。地面の感覚が草むらから、鍛えた土の感覚に変わった。すこしずつ人の声が聞こえはじめる。これで助かった。そう思った時、また右耳を虫の音がかすめ、頭にとまった。

「ひえ！」

また臭いを出されたらたまらない。ダイは狂ったように振り払うと、また右の方から虫の羽音が聞こえてきた。恐ろしくなったダイは左の方に走った。途中、通行人にあたり転んだ。しかしまだ羽音は、おっかけてきた。

「おい、あんた大丈夫かい」

当たった通行人が親切にも声をかけてくれたにも関わらず、ダイは虫から逃げるようにつけてかけた。

ようやく羽音がしなくなると、今まで嗅いだことのないような漬物の香りと売り文句で啖呵を切っている沢山の商人の音がした。どれも聞いたことのない声ばかり。

しまった。迷った。

大人とはいえ不安がつる。死ぬ覚悟までして、迷子くらいでビビッている自分が滑稽だった。

こういうときは人に頼る他ない。心を決め誰かに助けを求めよう。と思った時だった。

「さあ、さあいらっしやい。こちらは世にも珍しい薬屋ならぬ、毒屋でございます。西に大蛇が目覚ませば、行って牙を抜いてまいり、東にお化け蛙が跳ねたとあれば向かって脂を絞って参りまして、集めた毒が100種類！ ちょっとそこのお嬢さん。そうその可愛らしい黄色い着物の。こちら、なんと三日で三日間痩せられるってえ、すんごい毒でございます。どうです？その代り、六日後にちょっと

反動が来ちゃう。でもご安心、ほんの一日。ほんつの一日お化けみたいにブクブクに太っちゃうだけ。その後は元に戻ります。好いた相手に告白なんかする時はうってつけですよ。あれ？行っちゃうの？ ちよっと？お客さん？」

メチャクチャな啖呵を切っている男の声が真後ろで聞こえた。

「ミコト！」

振り向いて思い切り名を呼んだ。

「……あら？ あららら？ あなたこの間のメザシの佃煮の人」

「ふ、ふふふ、ふははははは」

ダイは、安堵してその場に座り込んで笑った。笑うダイを見て通行人は、変な顔で通り過ぎていった。

し、し、自然死ー？」

ミコトの大きな声にダイは思わず口を塞いだ。

「声がでかいよ。ばか」

「だって、あなた……」

二人はミコトが商売をしていたすぐ近くの茶屋で団子と茶をすすりながら会話をしていた。ダイは事の顛末を洗いざらい話した。

「持ってるだろ？ 毒屋なんだから」

「持ってません」

「何？」

「あなたね、人を殺す毒なんて持ってたら、すぐお上に捕まってしまいますよ。私のはあくまで人の困ったことを毒の副作用で治して、ほんの少しの本作用で苦しむのは我慢してね。っていう人様のため毒しか扱っておりません。まったく毒屋なめてもらっちゃこまりますよ。アンタみたいなたまーにいるんだよなあ。ホントいい迷惑だよ。だいちあれほと言ったのに、あの毒飲んじゃって……知りませんよホント」

ミコトは話にならないと、団子をむしゃむしゃと、ほうばった。

「金なら出す」

「だからね。持ってないもんは無いんだってば。ちよっとお姉さん、この団子の餡、ちゃんと塩入ってる？ あんた甘みばっかで深みが足りないよ」

「百五十文」

「お姉さん？ ちよっとお茶おかわり」

聞こえないとばかりにミコトは無視を決め込んだ。

「三百文」

ミコトがビクッ動いたのをダイは感じた。

「……あ」

ダイはもう一押しとばかりに上乘せした。

「四百」

「……」

ミコトはゴクリと喉を鳴らした。しかし、さすがにダイもこれ以上貯めた金を死に代に使うわけにはいかない。しばし沈黙が流れた。

「あの、どうしても死ななきゃダメなんですか？」

「あ？」

「死んだふりして、どっかに旅立つってのは？」

「え？」

晴天の霹靂。

ダイは思いつめて、本当に死ぬ事ばかり考えていたが、その手があつた。

「もしそれでいいんだつたら、いい毒がありますけど。脈が止まっちゃう毒。止めたい脈の周辺にちよつと塗るだけなんですけど……」

「けど？」

「十日程すると、すごく匂うんです。あの、カメムシって知ってます？ あれの五倍くらい臭いのが、ひと月くらい続くんなんですけど……」

「……」

ダイは眉間にシワを寄せたじろいだ。カメムシはホオズキ虫の別名だ。アレより臭い。

その威力は計り知れない。

「よ、よし、それでいい。その代わり、死んだことになった俺を速やかに遠くの町に連れていってくれるか？」

「それはお安い御用ですよ！ それで四百文ですね？ いやつたー憧れの最高級うな丼が食べられるー 美味いらしいんですよこれが 夏より冬のが旬で知ってました？ えへへへ」

「死なないから半額の二百文だね」

「え、ちよ、ちよつと待つてくださいいよー」

「ふはははは」

ダイは、久々に笑った。このミコトという男はどうも調子が狂う。



ダイがミコトに連れられて家に戻ったのは、お日様もそろそろ沈む頃だった。

「ツキ、帰ったよ。ツキ」

しかし、家の中から声がまったくない。またツキは留守のようだ。

「おかしいなこんな時間に、どこに行つたんだか」

「お邪魔しますね。うわぁ 見事なホオズキですねー」

外で待つていたミコトも中に入ってきた。玄関から居間、寝室、庭と一続きになっている長屋なのでまっすぐ夕日に照らされた庭のホオズキが見えるのだ。

「ちよつと庭に入つていいですか？」

「ああ、なあ。貼りかけの提灯、隅にあるかい」

草履を手にもつて居間上がったミコトは周囲を見渡し答えた。

「ありますね。いっぱい。大変そうだから。よっこらせつと」

縁側でまた草履を履いているようだ。

ダイは首をかしげた。この時間にツキが居ないことなど滅多になかった、あるとすれば買物だが、こんな夕方に買うものなんてあるだろうか。どこも夕餉の支度をしている時間だ。でも最近は自分の帰りが遅い分だいたい支度も遅くなっている。ツキの生活がズレてしまっているのかもしれない。

ダイも居間に座り草履を脱いだ。

「こんばんわ。私、ミコトと申します。ええ、ちよつと野暮用がございまして、はあ……」

変な男だ。ホオズキと話しているフリをしている。なんだか変わった冗談だな。ダイはくすりと笑い、羽織を脱いだ。

「おい、ミコト。ホオズキとなんか話してないで、台所に酒があるからツキが帰る前に一杯やらないか？ おい」

その声をかけたが、ミコトはホオズキとの話をやめなかった。

「はい、はい……はい？」

「まったく、変わった男だな。お前さんは」

ダイが立ち上がり、台所に行く手探りで酒瓶と杵を探し、持つて居間にまたどかつと座った。

ミコトがやっと庭からやって来た。しかし今度は草履を玄関の方に置こうとも、座ろうともせず、突然言った。

「あの、えっと、ここ一旦出ましょう」

「は？何言ってるんだ。やっとこさ長旅で帰ってきたんじゃないか。俺はもうクタクタだよ」

「いや、しのごの言ってる場合じゃないですよ」

ミコトは、アグラを掻いて足袋を脱ごうとしていたダイの両腕を上から、強引に引つ張り、立たせようとした。

「何するんだ。冗談にも程があるぞ！」

ダイは訳の解らないミコトの行動に本当に腹がたってきた。

……その時だった。

ビシャン！ という物凄い音が部屋中に響いた。

「貴様ああ……！」

この声は、八千。だが、えらい剣幕だ。。



「やばい、来ちゃった」

ミコトが、まるで八チが来るのを知っていたかのように呟いた。

「どうした八チ。何を怒ってるんだ？ おいミコト、そいつは俺の友人で……」

「知ってます。さっきほおずきさんに聞きました。あ、あの人、ノミ持ってます。あなたを殺す気ですよ」

ダイはミコトの言葉にビクッと反応した。

「な、何をバカな……」

ミコトの言葉を否定しようとするや八チがドスの利いた低い声で言った。

「お前がその気なら、悪いが先手を打たせてもらっせ、どけ！」

「ダイさん！ ちょっと逃げて！」

ダイは、何がなんだかわからない。

「やめて！ 八チさん！」

その時遠くから、ツキの声がした。遠くからまるで八チを追ってきたかのようだ。

「うるせー」

「きゃ！」

八チは後ろから抑えようとしたツキを突き飛ばした。

「ツキ！」

ダイはツキの悲鳴で立ち上がった。

「死ね！」

八チはダイに目掛けてノミを構えて突っ込んできた。ミコトがとつさにダイを突き飛ばす。ダイは壁にあたり倒れた。

ミコトとダイの間を通りすぎた八チは勢い余って庭に転げ落ちたが、すぐに立ち上がってダイに再び向かおうと、脅すように大きな音で縁側を踏み切った。

「やめてー！」  
「  
ツキの大きな声が部屋中に響きわたった。

プーン。

突然、一匹のホオズキ虫が八手の目の辺りにとまった。八手は煩わしそうに掃う。

プーン。

また、一匹、別のホオズキ虫が八手の右耳の辺りにとまった。八手は思い切りパチンと虫を耳もとで潰した。

プーン プーンプーンプーンプーンブブブブ……

庭のほおずきから、次々と無数の虫たちが八手の顔を覆い頭全体が、ホオズキ虫で真っ黒に見えた。

「う、うわああ」

八手は狂ったようにノミを振り回し、部屋の中を暴れ回った。偶然にダイの方に向かってきた。ミコトも危なくて近づけない。ダイは全く動けないまま頭を両手でかばった。

次の瞬間、温かいものがダイの頬にかかった。流れて口に入る。血だ。

ドサッと人が倒れる音がした。

誰かが切られたのだ。次の瞬間一番聞きたくない名前をミコトが呼んだ。

「ツキさん！」

ダイは絶句しながら居間をまさぐった。何かにあたった。足だ。

さわり覚えのある細い足。ツキが目の前で倒れているのだ。

「ツキ！」

ツキはノミを取り上げようとして、喉を切られ、スゴイ勢いで血が吹き出していた。

「ツキ、ツキ！」

ミコトは近くの羽織を引き裂いて、ツキの首にあて、何とか止血を試みた。

ツキが倒れてから、次第にホオズキ虫は八手の顔から、離れていった。

すごいにおいと潰した虫の体液で目をゴシゴシと拭っていた八手は、ツキを見て持っていたノミを力なく落とし、その場に落ちるようにしゃがみこんだ。

「こつちです。早く！」

近所のものが同心を連れて部屋に入ってきた。ミコトがふと外を見ると狭い長屋の通りに野次馬が数えきれず押し寄せていた。

ダイはボロボロと涙を流してぬったりと血だらけのツキの手を握った。

八手は奉行所の牢屋に入れられた。

事情聴取として、ダイもお白洲に呼ばれ沢山のことを聞かれた。この事件の担当同心、山本はダイの得意客、山本の倅で、ダイには特別な恩義をもって優しく色々と教えてくれた。それはダイにとって聞きたくない事実であった。

八手はツキと姦通していた。

その関係は、一年や二年ではなかったという。

八手は、ダイとツキが会おう前から、ずっとツキが好きだったと主張した。

しかしツキは、全くなびかなかったという。

だが、ダイは、ツキと知り合うと、あっという間に結納にこぎつけた。

少なからず嫉妬していたと八手は語った。

ダイが不慮の事故で目が不自由になってから、ツキは金に困っていた。八手は見かねて色々な職を紹介してやったのだが、当時の荒れたダイはツキがついてやらない落ち着いていられず、まともな仕事はみな勤まらなかった。それでもツキは生活のためにせつせと内職で二人分の食費を捻出していたという。だが、長屋の家賃が払えず困っているところを、八手が助けて払ってやったのだと……

(以降、八手の供述)

「最初はね。本当に金だけ貸していたんですよ。でもある時、ツキが、風呂上りの良い匂いをする時があつて、つい。ツキも俺の気持ちを知ってましたから、そんなに嫌がりはしませんでした。旦那、ツキの体見た事ありますか？ いつまで経つても小娘みたいにガリガリで、ちゃんと食ってんのか？ って聞いても大丈夫の一点張り。

心配して酒とか魚とか持つていってやると、あいつから礼なんて言われる。本当、その場で殴り殺してやるうかと思つてましたよ。当時の棟梁が、出世するなら身を固めろつて言うから、渋々他のの女と結納しましたけど。俺はね本当はツキが良かったんだ。ずっとツキのことが。ツキだつて……たぶんそうだったんだと思います。いづがあん摩始めて、俺に子供が出来ても俺たちの関係は続いてたんだから。この間、あいつが俺達の前で酒をこぼしたのを、必死に拭いているツキを見て、いつか何もかも捨てて一緒に逃げてやるう。そう思つてました。

それなのに、あいつは突然目が見えて全部知つてる風なことを言つて、ツキの面倒をみるとかい出し出て脅しにきたんですよ！ もう遅いですがね旦那、姦通となれば俺の大工の道も閉ざされる。そうしたら俺はどうなつてました？ 旦那、私はどうしたらよかつたんですか？ 旦那あ……」

ダイの取調べで、お白洲と一緒に八チとダイが居たわけではない。だがその供述を同心の山本が読み上げた時、ゴザの上でダイは、自分の膝小僧を血が出るほど搦んでいた。

「形式で白洲に呼んだがな、お前に聞くことなんざひとつも無いよ。あの男が今、罪を軽くしようと、自分の都合のいいように話してるのは解ってる。そしてお前がどんな男かも俺はよく知ってるさ。おそらく寝耳に水。八チを脅すつもりなんてこれっぽっちもなかったらうし、アイツが勘違いしたんだらうよ。お前にお咎めなんざ何も行かないから心配すんな。ああ父上がな、お前を別当（盲人の団体、当道座の位）に飛び級推薦すると言っていたぞ。だから気にするな。悪いのはみいんな姦通していた八チって大工と妻のツキだ。」

ダイは茫然と頭を下げたままで返事もできない。

山本は、奉行に目で合図を送り、奉行も無言でうなずいた。

「では、これにてあん摩師、座頭、ダイの取調べを……」

「なんとか……」

山本の閉廷の挨拶をさえぎって、ずっと無言だったダイが口を開いた。

「なんとか、ツキの罪を軽くしてやっていただけませんかでしょうか！　お願いします。」

「ば、お前なに言ってるんだ！　姦通！　ずっと浮気してた女だぞ！」  
「私が、私がみんな悪いのでございます。私が不甲斐ないばかりに……どうか、お願いでございます。別当の地位など何も惜しくはありません。どうか！　どうかツキに罰を与えるのだけは、どうか！」  
ダイは白洲の砂利に頭をこすり付けた。

「ばか……」

山本が困ってチラと奉行を見ると、奉行も困っておでこを掻いて

いた。他の同心も次のお白洲があるのにと、ちよつとイラついた顔でダイを見ていた。しかし、元々この白洲は八千の罪状を確定するものであつて、被害者ともとれるツキの罪状を鑑みるところではなかつた。というより、奉行所はツキのことなど、どうでもよかつた。

「では、10年の謹慎処分とする。以上。これにて、取調べ終了。」

次の白洲があるので、取調べ人はさつさと出て行くように「

「あ、ああ、ありがとうございます！」

ダイは深々とお辞儀をした。



ダイが奉行所から帰ると、ミコトがツキの横に付き添っていた。

ツキは意識不明のまま、もう四日間寝たきりであった。

「この二日あたりが山場ってさっきお医者さんが」

「そうか……」

ダイは草履を脱ぐと手探りで居間に入りミコトの隣にすわった。

「それと……」

「あ？」

ミコトはダイの肩に軽く手を置いた。

「切った場所が喉の声を出す部分らしくて、例え助かってても、おそらく一生。話す事が出来ないらしい……とのことです」

肩の手を下ろすとミコトは大きなため息をもらした。

ダイは無言でうなずくのが精一杯。

そして、ツキの手をとった。

(すまねえ。俺が不甲斐ないばかりに……本当にすまねえ)

声に出せず、眉間にシワをよせてひたすら強く優しくツキの手を握った。

(本当に俺は、生きる価値のねえ……)

ダイは体を震わせ、声を出さず泣いた。

ミコトはすつと立ち上がると庭に出た。提灯のように包まれた橙色のほおずきの実を見つめた。

「さすがにだいぶ減りましたね。カMEMシ」

ダイは涙を拭い、庭の方に顔を向けた。

「そういえばあの時、ホオズキ虫達がハチの顔に覆いかぶさったと聞いたが、いったいあれは……」

ミコトは、庭に落ちていた如雨露を拾い、瓶にためてあった水をヒシャクで入れた。

そうして、ほおずきに水を巻いた。

「あれはね、中に一匹、霊枝がいたんです。」

「れいし?」

「ええ、霊枝はだいたひ百年以上生き続けた草木に現れる特別な枝のことです。自分の種が絶滅の危機に瀕した時にそなえ、木のままではなく自分たちの周りにいる動物や虫に姿を似せて、いざという時、種を持って安住の地を探す。時に、その地を守るために活動したりするんです。」

「へえ」

「ええ、おそらくこのほおずきは、ツキさんが先祖から代々受け継いできたものなんじゃないでしょうか? とすればほおずきにとつて安住の地はツキさんて事になる」

「なるほど……そらあるかもしれんな」

ツキがほおずきを愛していたのはよく知っていた。

ダイは見えずともツキの顔の辺りをじっと見つめニツコリと笑った。

「ツキ、お前が死んじまつたらよ。ほおずきも悲しむってよ。元気になつて、また水やらなきやな」

優しくツキに話しかけると、ミコトが割りこんできた。

「いえ、ですから。危険を感じたらおそろく、ホオズキの実でも抱えてこのカメモシがどっかにですね……」

「黙つてろお前は! このばかが!」

「あ、すみません」

「まつたく」

「あの」

「なんだよ」

「すごいの見つけちゃったんですけど、さっき」

## 23部 最終話

「あ？」

「瓶に入ったすごいお金」

ダイは自分の貯めた金を瓶に入れて軒下に隠したのを思い出した。丁度今、ダイが座っている辺りの下だ。

「お前な。人の家の軒下勝手に漁ってんじゃねーよ！」

さすがにダイは立ち上がり庭のミコトを叱りに行った。

「軒下？ そужゃなくて、さつき水を汲みに庭の瓶を持ち上げたら、下にもう一つ瓶が蓋して埋めてあつて」

「何？」

ダイには、何のことやらさっぱり解らなかった。

「中に沢山のお金とどっかの神社のお守りが入ってるんです」

「神社つて……」

「瀧谷不動？ どの神社でしょうか」

ダイはその名前に体が固まった。知っていたからだ、その寺を。

「……遠い西の寺院だ」

「へー、よく知ってますね。でも何のお守りですかね。」

振り返ってツキを見た。ダイには見えないけれど、ツキの笑顔が見えていた。

「眼病平癒。目の神様だ」

ダイはツキの傍らに座り、また手を握った。

謎が解けた。

ずっと、ずっと……

ツキはダイのために金を貯めていたのだ。

瀧谷不動は有名な眼の神様。その高額なお札で何人も目が見えるようになったという話は有名だ。ツキは、食べる物もロクに取らず、自分の体をも売って神様に祈ろうとしていたのだ。

ダイはその場でむせび泣いた。

ミコトはお守りを瓶に戻し、静かに蓋をとじ、居間に入ってきた。

「では、始めましょうか」

ミコトの突然の発言にダイは顔を拭った。

「あ？」

「あなた、あの毒飲んだんでしょう？ だったら早く抜かなくては他に神経がやられないうちに。なーに、目じりから出てる芽をちょいと引つ張るだけですから」

「……」

「生きなきゃ、いけませんものね」

ダイは拳を握り締め答えた。

「ああ、生きなきゃな」

ホオズキは風に揺れた。

何年か後。ミコトは旅の途中でこの町に再び訪れた際、この長屋を尋ねた。

しかし、残念な事に夫婦の姿もほおずきの姿も無かった。

隣人の者に聞くとところによると……

結局、夫の目は見えるようにはならず、妻の口も利けるようにはならなかった。

いろいろあったこの街にはもう、戻ってくる気はないと言ってたらしい。

今はどこか西の方に引つ越していったという。

仲良く、三人で……

了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2538n/>

---

ミコト ほおづき

2010年10月12日13時54分発行